



その子の持ち味をまるごとを知る意味

園長 野中 泉

先週、和歌山の子ども園や児童発達支援センターの管理職の方たちの集まりで、元理事長の市原とふたりでお話しをさせていただく機会があったのですが、参加者の方の「今、和歌山でも登校拒否、学校に行けていない子たちがとても増えているのですが、そのことに関して、幼稚期に私たちができるって何かあるでしょうか？」という質問に対して、市原が自身の体験を交えてこんなふうに答えました。「その子のことを、よく知っておく。まるごとを知るということでしょうか。なぜ、行きたくないのか。または、行けないのか。本人の赤ん坊のころからの苦手や特徴（持ち味）とつながっていることも少なくありません」。

私はそれを聞きながら、改めて2月7日、8日の2日間にあった、みかん組の懇談会を思い出していました。小学校への個人の「引継ぎ資料」を参加者全員で読む5歳児の懇談会でした。他園では、我が子の引継ぎ資料も親に開示しないのが普通ですが、アトムでは参加の親全員で全員分の引継ぎ資料を共有します。しかも、「その子のわかりやすく良いところや、得意なことは、わざわざ書かなくても、学校の先生にも、友だちにもすぐに気がついてもらえるでしょう。だから、あえて苦手なことやこだわり、困ると予想されることなど、知っておいてほしいことを書きます」というその資料は、その言葉どおり、毎年とても正直な資料です。

「リーダーシップをとうろうとするが、自分中心になってしまい、かえってトラブルになる」「自分の思い通りに、友達を誘導しようとする姿がある。思い通りにならないと、暴言になったり手がでる」「失敗や間違いが嫌で、やる前から尻込みしたり、失敗をごまかそうとする姿がある」。今年も、知らない人が聞くと少しどキッとするような表現の資料が続きましたが、どの保護者も我が子の資料を読み上げ「あ～、これうちの子だわ」「あるなあ、こういうところある」「よく見てくれてるわ」と頷きます。その声につられるように、あちこちで、笑い声と共に「ああ、そうだ○○ちゃんやあ」「このまんまやでな」「でも、反対にこんな姿もあるで」とあちこちでお母さんたちが頷き合ったり、資料に足し算したりする光景に、担任と親たちが、どれくらいその子のまるごとを（我が子の事だけでなく、他の子のこと）やりとりしてきたのか、その大事な積み重ねが見えてきます。

5歳児の懇談会に出た翌週は、1歳児の最後の懇談会でした。食べない、寝ない、言葉が遅い、おしっこをトイレでしない。イヤイヤ言う。1歳児あるあるの悩みごとに、みんなで「うちもうちも」と共感しあった後、ひとりのお父さんが「我が子には『普通』に育ってほしい」といました。この「普通」という言葉にひつかかった私が「普通って、どんな感じの子のこと？」とあえて、つっこんだのですが、急に思いがけない質問だったのか、このお父さんも含めて会場ではみんなが「う～ん」と首をかしげて言葉がでません。そこで、続けて「じゃあ、この中で、私は普通だと思う人手を挙げてみて」とも聞いてみたのですが、やはり、みんなが顔を見合わせて、結局、手を挙げた保護者は誰もいませんでした。

保育園にいると、まさに十人十色、子どもはひとりひとり全く違うということを日々実感します。Aくんは、身体を動かすことが好きで、園庭ではボールを上手に蹴ることを日々、黙々と研究している。リズム感がいいBちゃんは、身体の使い方もおもしろく自作のブレイクダンスでみんなを笑わせる。Cくんは昆虫が好きで、読むのは必ず昆虫図鑑、園庭では一日ダンゴムシを集め、新しい虫を見つけると、必ず報告に来る。Dちゃんはお勉強は苦手だけど、おもしろい遊びを思いつく天才で、いつも遊びの中心にいる。Eくんは、力も強くいつもはいばっているが、はじめての場所では緊張してソワソワと落ち着かない。例えば、これらの5人の子どもの違いは、比較したり序列をつけて評価するするようなことではありません。ただ、それが、それぞれの「持ち味」だということです。それに対して、「持ち味」は、他の誰かと比べてほめるものではなく、ただ、驚いたり、感心したり、共感したり、尊重されたりするものです。

引継ぎ資料を共有する懇談会で担任は毎年必ずこう言います。「何かあったときに、この子の持ち味を、いいところも悪いところもまるごと知ってくれている大人が、親と先生以外にも地域にいる。それが、この子たちが、これからも安心して育つ上で大事なことだと思うのです」。みかん組さん、卒園おめでとう。あなたたちのまるごとを、これからも応援しています。